

死別後悲嘆・複雑性悲嘆に伴う生産性低下 (労働損益)

藤澤 大介*

サマリー

死別後悲嘆（特に複雑性悲嘆）は、死別後の就労中止に影響を及ぼし、就労継続者においても、主として出勤中の生産

性低下 presenteeism に起因する労働生産性の低下（労働損益）をもたらすことが示唆された。

目 的

死別後に一定期間経過しても持続して医学的関与が必要となる悲嘆反応は、複雑性悲嘆 (complicated grief; CG) と呼ばれる。わが国の CG の有病率は 2.4~7% と推計されており¹⁾、少なくとも年間約 13 万人の罹患に相当する。複雑性悲嘆が健康に及ぼす影響はわが国でも実証されている²⁾が、それに伴う社会コストは数量化されていない。そのため、本研究では悲嘆や複雑性悲嘆が生産性の低下（労働損益）に与える影響について検討した。

方 法

緩和ケア病棟、一般病棟、在宅で患者を看取った遺族に以下を実施し、関係を解析した。

1) 仕事の生産性および活動障害に関する質問票

仕事の生産性および活動障害に関する質問票：健康全般 Work Productivity and Activity Impairment Questionnaire: General Health V2.0 (WPAI-GH) は、心身両方の健康問題に伴う、「仕事における生産性の低下 Work Productivity Loss」(欠勤に伴う生産性低下 absenteeism, ならびに、出勤中の生産性低下 presenteeism の総計) と「仕事以外の活動における生産性の低下 Activity Impairment」を測定する、6 項目からなる評価尺度である³⁾。

2) 簡易悲嘆尺度 Brief Grief Questionnaire (BGQ)

複雑性悲嘆の症状を測定する 5 項目の尺度で、本邦における妥当性が検証されている⁴⁾。BGQ の総合点が高いほど悲嘆症状は重症であり、0~4 点が複雑性悲嘆なし、5~7 点が possible

*慶應義塾大学 医学部 医療安全管理部 (研究代表者)

complicated grief (本研究では、複雑性悲嘆予備群と定義)、8～10点がprobable complicated grief (本研究では、複雑性悲嘆群と定義)と分類されている。

カテゴリ変数は X^2 検定(またはFisher正確検定)、連続変数は一元配置分散分析を用いた。

結果

1) 回答者背景

本研究では、調査票は総計1,865名に送付され、有効回答者は935名(有効回答率50.1%)であった(内訳:緩和ケア病棟1,100名に送付、671名から回収、有効回答560名(有効回答率50.9%)、一般病棟の遺族413名に送付、240名から回収、有効回答182名(有効回答率44.1%)、在宅ケア遺族352名に送付、226名から回収、有効回答193名(有効回答率54.8%))。

有効回答者935名の年齢は平均74.5歳(標準偏差SD=11.7, 30～102歳)で、男性507名(54.2%)、女性428名(45.8%)であった。患者との続柄は、配偶者429名(45.9%)、患者の子ども355名(38.0%)、婿・嫁50名(5.3%)、同胞46名(4.9%)、患者の親19名(2.0%)、未回答・その他38名(4.1%)であった。死別から調査日までの期間は、平均400.4日(SD=197.0, 172～1,536日)であった。

2) 就労状況、悲嘆との関係

就労状況に関しては、有効回答914名のうち、①回答時点で就労している人(就労継続群)509名(55.7%)、②患者の病気や死別の影響で退職した人(患者理由退職群)54名(5.9%)、③その他の理由で退職した人(その他理由退職群)56名(6.1%)、④元から就労していなかった人(非就労群)295名(32.3%)であった。

そのうち、簡易悲嘆尺度に回答した873名を対象に各群における複雑性悲嘆の有病率と悲嘆症状の重症度(BGQ総合点)とをそれぞれ表1、表2に示した。複雑性悲嘆の有病率は、②患者理由退職群が、①就労継続群より有意に高かった(表1)。悲嘆症状の重症度は、①就労継続群が、②患者理由退職群、ならびに、④非就労群、と比較して有意に低かった(表2)。

3) 仕事以外の活動における生産性の低下

全有効回答者における、健康問題による「仕事以外の活動における生産性の低下」を表3に示す。①就労継続群では、他群と比較して有意に生産性低下が軽かった。

複雑性悲嘆との関係を検討したところ、複雑性悲嘆なし<複雑性悲嘆予備群<複雑性悲嘆群の順で、「仕事以外の活動における生産性の低下」が大きかった(表4)。

表1 就労状態と複雑性悲嘆の有病率

	複雑性悲嘆なし BGQ ≤ 4	複雑性悲嘆予備群 BGQ=5～7	複雑性悲嘆群 BGQ ≥ 8	合計	} $\rho < 0.001$
①就労継続群	261 52.8%	190 38.5%	43 8.7%	494 100.0%	
②患者理由退職群	13 25.5%	24 47.1%	14 27.5%	51 100.0%	
③その他理由退職群	24 46.2%	22 42.3%	6 11.5%	52 100.0%	
④非就労群	116 42.0%	124 44.9%	36 13.0%	276 100.0%	
合計	414 47.4%	360 41.2%	99 11.3%	873 100.0%	

Fisherの正確確率検定, $X^2=27.6$ (d.f = 6), $\rho < 0.001$

表2 就労状態と悲嘆症状の重症度

	n	平均BGQ総合点	標準偏差	Bonferroni 多重検定
①就労継続群	494	4.25	2.352	①<②, ①<④
②患者理由退職群	51	5.78	2.166	①<②
③その他理由退職群	52	4.79	2.261	
④非就労群	276	4.89	2.251	①<④
サンプル全体	873	4.57	2.339	

BGQ: Brief Grief Questionnaire
一元配置分散分析, $F=9.7$, $p<0.001$

表3 仕事以外の活動における生産性の低下 (%)

	度数	仕事以外の活動における生産性の低下 (%)	標準誤差	95% 信頼区間		多重比較
				下限	上限	
①就労継続群	302	20.1	1.6	16.9	23.3	①<②, ①<③, ①<④
②患者理由退職群	47	32.8	4.2	24.4	41.2	①<②
③その他理由退職群	48	34.4	4.8	24.8	44.0	①<③
④非就労群	239	28.2	1.9	24.5	31.9	①<④
サンプル全体	636	25.2	1.2	22.9	27.4	

一元配置分散分析, $F = 6.7$, $p < 0.001$; Bonferroni 多重比較, $p < 0.05$

表4 仕事以外の活動における生産性の低下と悲嘆の関係

	度数	仕事以外の活動における生産性の低下 (%)	標準誤差	95% 信頼区間		多重比較
				下限	上限	
a 複雑性悲嘆なし	283	16.7	1.5	13.9	19.6	a < b, a < c, b < c
b 複雑性悲嘆予備群	254	30.4	1.9	26.6	34.1	
c 複雑性悲嘆群	74	40.9	3.6	33.7	48.2	
サンプル全体	611	25.3	1.2	23.0	27.7	

一元配置分散分析, $F = 28.7$, $p < 0.001$; Bonferroni 多重比較, $p < 0.05$

4) 労働損益

①就労継続群 509 名を対象に生産性の低下（労働損益）を検討した。

欠勤に伴う生産性低下 absenteeism は、対象サンプル全体の平均が 1.9% で、複雑性悲嘆の有無・重症度による差を認めなかった。出勤中の生産性低下 presenteeism は、対象サンプル全体の平均が 13.8% で、複雑性悲嘆の重症度が増すにつれて増悪した。健康問題に伴う生産性低下（労働損益）全体（absenteeism と presenteeism の総計）も、複雑性悲嘆の程度が増すに従って増加した（表 5）。

考 察

本研究サンプルにおいて、患者の病気や死別の影響で退職した人が 5.9% 存在した。同群では悲嘆症状の重症度と複雑性悲嘆の有病率が有意に高く、悲嘆が退職に影響を及ぼしていることが示唆された。

就労を継続している群において、悲嘆は、absenteeism には有意な影響を与えていないが、presenteeism には有意な影響を及ぼしており、以上を総合すると、悲嘆症状、特に、複雑性悲嘆が、遺族に対して無視できない労働損益をもたらしていることが示された。

表5 就労継続者における生産性低下と悲嘆の関係

		度数	平均値	標準誤差	95% 信頼区間		Bonferroni 多重比較
					下限	上限	
欠勤に伴う生産性低下 Absenteeism (%)	a 複雑性悲嘆なし	221	1.1	0.5	0.1	2.2	F = 2.09 N.S.
	b 複雑性悲嘆予備群	137	3.4	1.2	0.9	5.8	
	c 複雑性悲嘆群	30	0.8	0.7	-0.6	2.1	
	サンプル全体	388	1.9	0.5	0.8	2.9	
出勤中の生産性低下 Presenteeism (%)	a 複雑性悲嘆なし	168	9.2	1.4	6.4	11.9	F = 10.27 a < b a < c b < c
	b 複雑性悲嘆予備群	107	18.1	2.3	13.5	22.7	
	c 複雑性悲嘆群	24	26.7	6.3	13.7	39.6	
	サンプル全体	299	13.8	1.3	11.2	16.3	
仕事における生産性の低下 (Absenteeism +Presenteeism) (%)	a 複雑性悲嘆なし	162	10.0	1.5	7.0	13.0	F = 8.92 a < b a < c
	b 複雑性悲嘆予備群	100	21.3	2.9	15.6	26.9	
	c 複雑性悲嘆群	23	24.1	5.7	12.3	36.0	
	サンプル全体	285	15.1	1.4	12.2	17.9	
仕事以外の活動における 生産性の低下 (%)	a 複雑性悲嘆なし	155	13.3	1.9	9.5	17.0	F = 11.83 a < b a < c
	b 複雑性悲嘆予備群	113	26.1	2.8	20.6	31.6	
	c 複雑性悲嘆群	27	34.8	6.4	21.7	48.0	
	サンプル全体	295	20.2	1.6	17.0	23.4	

一元配置分散分析, Bonferroni 多重比較, $p < 0.001$

まとめ

本研究は、筆者が知る限り、わが国において悲嘆・複雑性悲嘆が遺族にもたらす生産性低下(労働損益)を試算した初めての研究である。

文献

- 1) Fujisawa D, Miyashita M, Nakajima S, et al. Prevalence and determinants of complicated grief in general population. *J Affect Disord* 2010 ; 127 (1-3) : 352-358.
- 2) Aoyama M, Sakaguchi Y, Morita T, et al. Factors associated with possible complicated grief and major depressive disorders. *Psycho-Oncology*

2018 ; 1-7.

- 3) Reilly MC, Zbrozek AS, Duker EM. The validity and reproducibility of a work productivity and activity impairment instrument. *Pharmacoeconomics* 1993 ; 4 (5) : 353-365.
- 4) Ito M, Nakajima S, Fujisawa D, et al. Brief measure for screening complicated grief: Validity and reliability in the general population. *PlosOne* 2013.

[付帯研究担当者]

藤澤大介 (慶應義塾大学), 伊藤正哉 (国立精神・神経医療研究センター), 中島聡美 (武蔵野大学), 竹林由武 (福島県立医科大学)